

附表 耐震診断の評価の結果と構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性の評価

※①耐震診断結果のうち最小のものを記載

② $I_{s0}=0.6$ 、 $Z \cdot G \cdot U=1.0$ とする。

③構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性の評価の分類

耐震診断の方法	構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性		
	I	II	III
一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」及び「第3次診断法」(2001年版)	$I_s/I_{s0} < 0.5$ 又は $C_{TU} \cdot S_D < 0.15 \cdot Z \cdot G \cdot U$	左右以外の場合	$1.0 \leq I_s/I_{s0}$ かつ $0.3 \cdot Z \cdot G \cdot U \leq C_{TU} \cdot S_D$
一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄骨造建築物の耐震診断指針」(1996年版、2011年版)	$I_s < 0.3$ 又は $q < 0.5$	左右以外の場合	$0.6 \leq I_s$ かつ $1.0 \leq q$

I：大規模の地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が高い。

II：大規模の地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性がある。

III：大規模の地震の振動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が低い。

震度6強から7に達する程度の大規模の地震に対する安全性を示すもので、いずれの区分に該当する場合であっても、違法に建築されたものや劣化が放置されたものでない限りは、震度5強程度の中規模地震に対しては損傷が生ずるおそれは少なく、倒壊するおそれはないものとされています。

用語の解説

I_s	構造耐震指標。構造体の耐震性能を表す指標で、この値が大きいほど耐震性能が高くなる。
I_{s0}	構造耐震判定指標。 I_s 値の判定基準となる指標で、地域、用途により変化する。
$C_{TU} \cdot S_D$	建物の強度、形状により求められる耐震性能を表し、この値が大きいほど耐震性能が高くなる。
$Z \cdot G \cdot U$	Z：地域指標、G：地盤指標、U：用途指標により建物の必要とされる耐震性能を表す。
q	建物の耐震性を表す指標。この数値が大きいほど耐震性能が高くなる。